

警察労働運動の卑劣な先導者 = 革マル・嶋田 誠 (告訴) を許すな!

日刊 労働千葉

82,3,19

No. 996

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五六(公衆電話)22七二〇七

6にデッチあげ事件

6にデッチあげ事件 (3月30日)

へ決起しよう。

去る三月二日、第四回公判の中で、ついに、動労「本部」革マル・千葉への潜入分子・嶋田誠が証言台に立った。

わが動労千葉と「本部」革マル反動分子との数年にわたる組織争闘戦の中で、危機的状況を暴力襲撃にうつてた「七九年四・一七津田沼支部武装襲撃」や「八一年六・一二デッチあげ告訴」等々の、その最も極悪の手引き者としてのみ存在した嶋田誠！この卑劣・革マル分子が裁判所・権力に寄りすがって、醜態な姿をさらけ出したのである。

権力の保護に大喜びし、「Vサイン」ではしやく革マル・嶋田

十二時五〇分、千葉地裁の前に、関東動員(？)東京を中心とした革マル反動分子と追従者に守られて来た嶋田は、この日も地裁前で動労「本部」革マルを防衛に来た県警機動隊・公安刑事に對面するや、なんと急に喜び勇んで両手でVサインを出し、権力と一体となった姿を満天下に証明した。

ところが、法廷に立った嶋田は、一転して権力に對して、この上ないしおらしさを装い、こうべを垂れて裁判官・檢察権力にあわれみを乞う演技を必死にくりかえしていたのである。つまり、「私は「四・一七襲撃」のような暴力など振えるような人間ではございません。」「いつも千葉動労の暴力におびやかされている被害者でございます」とばかりに、ベテラン的な下劣な演技を行い、しかも、「暴力のない明るい職場をつくりたい。職場の正常化のために告訴した。」とヌケヌケとしゃべるなど、まさにフアシストならではの卑屈な態度を展開したのである。この事は、動労「本部」革マルの、権力万能論、権力は絶対強い、権力への絶対服従の思想そのものを、はっきりと示す事実である。

化けの皮はがれた、嶋田誠のデタラメな「証拠・証言」

嶋田の「証言」の第一の反動性・破産性は、「暴行事件」なるものをデッチ上げてはみたもの、それではなぜ「当日、動労千葉が暴力行為におよばなければならぬかの動機、背景」について、説得性ある説明は何一つ出来ず、終始沈黙してしまつたのである。つまり、自らが「四・一七武装襲撃」の際、革マルのスパイ手引者として行動

した嶋田誠は、だから自らの罪状がバクロされることに恐怖して、「暴力一般」論にスリカエる事以上に、答えられないのである。

嶋田「証言」の犯罪性・デッチ上げ性の第二は、「嶋田が当日着ていた青シャツに靴の跡」があり、「下着に泥の汚れ」がある、として、「証拠品」なるものを提出しているが、そのデタラメ性である。一見してわかることではあるが、常識的に上に着ている青シャツに靴の跡のみで、その下に着用している下着の方に泥が付いているというデタラメに不可能なことを嶋田はゴタゴタこじつけるために四苦八苦するありさまであった。おまけに嶋田の証言によると、「事件の翌日、女房が洗たくをしてしまった」(もし本当に暴行を受けて汚れた衣類だ、というのが本当だとしたら、嶋田ともあろう人間が、その「最重要証拠物」たる衣類を簡単に洗たくしてしまったというの奇妙な話ではないか!)というおそまつな「証拠」ねつ造ぶりの一端をのぞかせたのである。さらに面白いことには、青シャツの靴のあと、ましてその下着についた泥が「洗つても落ちずこのように残った」と「証言」し、廷内、思わず「ずい分変わったセッケンを使っているのですネ」と大失笑を買ったという、低水準なデッチ上げ工作の内情までもさらけ出してしまったのである。

すべての組合員の皆さん。このように、デッチ上げを買くためには何でもそれらしく利用・創り出し、ましてや今日では「暴力一般」論にスリカエることまでして権力の弾圧を要請する極悪の「本部」革マル反動分子の手引者嶋田誠を怒りをこめて粉碎しよう。次回3・30第五回公判に決起しよう。

